

第一節 江戸時代の経済

大坂のはじまり

大坂の地に街が出来たのは、天文元年（1532年）、石山本願寺の寺内町として形成されたことに発する。本願寺が全てを支配し、信長との闘争に事実上敗れるまで、経済特権都市として繁栄し続けた。

今日の大坂（明治維新まで大坂）の基礎は、豊臣秀吉が築いた。天正11年（1583年）より数年で、大坂城と城下町を築き上げた。秀吉は、自由都市として栄えた堺の特権を剥奪して大坂に与え、城下町集中政策を採った。そのため他の都市から商人が移住し、農家の二三男も流入して、商業人口が増えていった。大坂の急成長により、それまで商業の中心地だった京都が寂れた。摂津の搾油業者も、秀吉の命により大坂に移住させられた。

大坂は、大坂夏の陣（1615年）でいったんは焦土と化したのが、幕府は元和元年（1615年）より、復興事業を行った。そして元和6年（1620年）から寛永15年（1638年）にかけては、西国の諸大名に命じて、大坂城の再建工事に当たらせた。それは、秀吉の城を完全に土中に埋めて、その上に新しい城を建てるという大がかりなものであった。

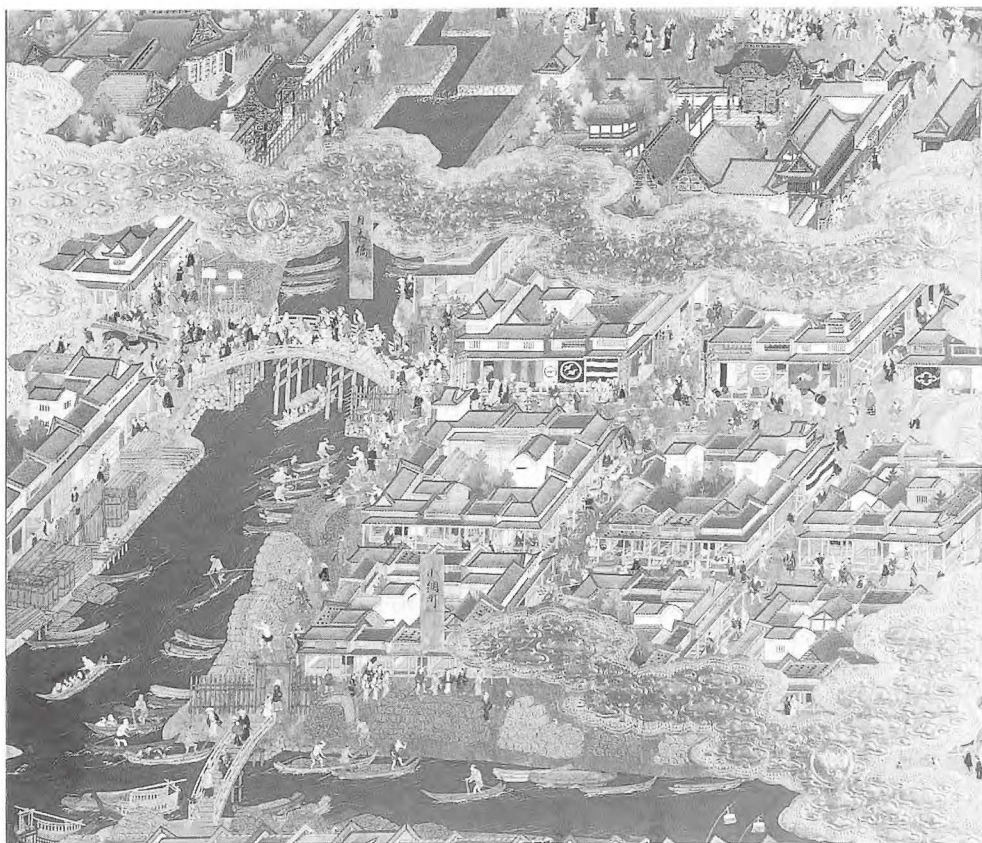
大坂には、同じ幕府直轄の大都市でも、江戸とは顕著に異なる特徴があった。それは、武士人口の少なさである。総人口30万から40万人に達する中で、武士は大きく見積もっても、わずか1,500人にも満たなかったと推算されている。大坂は、正に町人の都、すなわち商人の都であった。

大坂が「天下の台所」と呼ばれたのは、京とは明らかに異なり、生活に密着した物資の全国流通の拠点として機能していたからである。京も大坂も周辺に手工業者が集まり、経済の基盤を支えた点では同じだが、京周りの二次産品が絹織物など贅沢品が中心だったのに対して、大坂周りは、油や木綿などの生活必需品が中心であった。これらの製品も戦国時代までは庶民の手の届く物ではなかったが、世の中が安定し、生産能力と生活水準が向上したことで、大都市では必需品となりつつあった。さらに、後の節で述べるように、問屋とその仲間組合も、まず大坂で発達したもので、大坂は問屋商人の町と言われることもある。また世界で初めて先物取引引きを行った米市場も、江戸ではなく大坂に

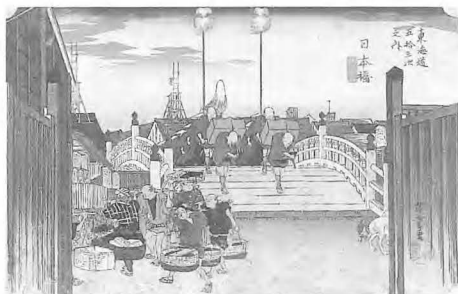
出来た。さらに海運の時代に入り、内陸部の京都に対して、海に面し河川も多い大坂の優位が決定的になった。そして西廻り航路が開拓されるに及び、日本海側や江戸との廻船の往来が頻繁になり、大坂経済の繁栄を築いた。

江戸のはじまり

慶長8年（1603年）、関ヶ原の合戦に勝って天下人となった家康は、江戸城の改築と同時に、大規模な江戸の街づくりに着手した。不毛の湿地に茅葺き屋根が点在する江戸は、百万都市に生まれ変わった。その最大の目的は、埋め立て工事によって、住宅地と商業地を造成することにあった。駿河台にあった神田山が跡形もなく崩され、その土で日比谷、日本橋、京橋などの埋め立て地が作られた。その発想と基本的技術は、後世に受け継がれた。二代将軍・秀忠は、伊達政宗に命じて、本郷の台地を崩して御茶の水に川をつくり、湯島台と駿河台を分離した。一方、芝崎町（現大手町）にあった神田明神を、将門首塚を除



▲日本橋の繁栄（「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)



▲東海道五十三次 日本橋
(東京国立博物館蔵)

いて北西の湯島に移して江戸総鎮守とし、風水上も完璧を期した。港湾も整備して、大型船の入港を容易にした。

江戸の人口は、約100万人、後期には130万人以上ともいわれるが、流動が激しく、計算の仕方もまちまちで、実際のところは判明していない。男女の比率は、中期には男6に対し女4と不均衡で、参

勤交代の単身赴任によるところが大きい。このため、吉原の遊廓が栄えた。後期には、是正されて、ほぼ同数となったとみられる。

江戸では、未曾有の大都市が出来たことで、歴史上初めてゴミの処理が問題になった。糞尿は肥料としてすぐ買い取られたが、一般ゴミは、火事になるので野焼きが禁止されたため、河川への投棄が大問題になった。そこで幕府は次々に埋め立て地にゴミ捨て場をつくり、税金（芥銭）で指定業者の船を運営して運ばせた。結果的に、江戸は世界の他の大都市には例を見ない清潔な環境を維持したといわれる。

水運網の整備

江戸は武家地が60%、寺社地が20%を占め、町屋は残りの僅か20%に押し込められた。従って幕府は、諸大名・旗本などの膨大な生活消費財を賄い、また初期には、江戸城などの造築に必要な資材の荷場や人夫達に生活物資を供給する必要があった。

大都市・江戸の人口を養うためには、米の大増産が急務であった。わが国における治水・灌漑事業は、中世を通じて各領主の下で行われていたが、徳川幕府にとって、それは基幹事業の一つであり、大規模な計画が進められた。初代将軍・徳川家康は、天正18年（1590年）の江戸入府と同時に、利根川水系の大規模改修工事に着手した。その中核を成した大工事が、利根川の瀬替えであった。

それまでの利根川の自然の流れは、江戸湾（東京湾）に注いでいた。銚子に注いでいたのは鬼怒川であった。幕府は、寛永10～11年（1633～1634年）の、いわゆる天下普請によって、関宿付近で利根川を、鬼怒川の支流の常陸川に分流させた。これにより、利根川は今日見られるような、銚子に河口を持つ川と

なったのである。同時に荒川を西にずらし、江戸川も開削した。現在の安定した関東平野は、元は荒川、利根川、渡良瀬川の洪水に常時さらされていた不毛の低湿地で、幕府の力で豊かな水田地帯に変えられたのであった。

関東水脈の要というべき葛西用水は、利根川の瀬替えと並行して、利根川や荒川の元の通り道を利用してつくられた。葛西用水の利根川からの取水口は、昭和43年（1968年）まで、約300年間使用された。

もう一つの要、見沼代用水は、享保12年（1727年）に開削された。工事には、八代将軍吉宗が紀州から連れてきた井沢為永が当たった。この用水は、見沼を干拓し、まったく新しい水路を開削してつくったもので、幹線水路だけで96kmに及ぶ大工事を、わずか半年で完成させた。これは、予算と人手もさることながら、技術力の進歩に負うところが大きい。「伏越^{ふせごし}」と呼ばれる立体交差の技術などは、基本的には今日まで変わらない。そして見沼代用水は、先行の葛西用水と組み合わせる形で、江戸の水田を潤していった。

治水事業には、水の確保以外にも、重要な目的があった。一つは洪水の防止であり、もう一つ、より重視されていたのが、水運網の整備である。家康が直ちに開発した、江戸～行徳間の小名木川運河は、全国規模の海運網と、関東の河川交通を初めて合体したものであった。そして利根川の瀬替えによって、利根川と鬼怒川が一体化した。当時の帆船の水準では、東北沖を南下してきた船が房総半島を回って直接江戸湾に入るのは困難であった。そこで、いったん下田に寄って風待ちするか、あるいは銚子で下ろして、河川と陸路を併用して江戸へ行くか、いずれにしても効率の悪い方法を強いられていた。それゆえに、銚子から利根川に入って江戸へ向かう水路の開通は画期的なことであった。

船が定期的に運航するためには、港の整備も欠かせない。慶長11年（1606年）の江戸城改築時には、諸大名に命じて、諸国から巨木大石を運ばせたので、海上交通が発展するきっかけとなった。さらに慶長16年（1611年）には大規模な港湾工事を行い、江戸湊は京橋地区まで延長された。『往古江戸地図』によれば、江戸橋付近を中心として日本橋川筋、京橋川筋、楓川筋が江戸湊の内港を成していた。このうち日本橋川筋は、日本橋川、伊勢町堀留町入堀、箱崎川浜町堀、薬研堀、霊岸橋川、小網町北から元大坂町に達する堀などから成っていた。

元和6年（1620年）、浅草は蔵前に幕府の米蔵が建てられ、この地に大坂をはじめ全国から送られた米が集まった。物資を荷揚げする場所は河岸と呼ばれ、おおよそ商品毎に河岸の場所が決まっていた。鰹河岸、米河岸、材木河岸など

のほか呉服町、木綿町、金物町、小間物町など商業の街が形成されている。

江戸の街は火事が多く、しかも町人は「宵越しの銭は持たぬ」ことを美風としていたので平時の蓄えに乏しく、火事が大工や職人の増収をもたらし、景気浮揚につながる一面があった。中でも明暦の大火（1657年）は、根本的な都市計画の実施につながった。万治3年（1660年）には、隅田川に両国橋が架けられ、その周辺に運河を掘り、道をつけて新市街地とし、以後、物資流通の要となったのである。

石高制から貨幣経済へ

徳川幕府は、幕藩体制の財政基盤として、徹底した米本位制度を実施した。いわゆる石高制である。石高制の下では、藩の規模から武士の給与に至るまで、全てが米の生産能力で表され、これに基づいて年貢が課税された。そこから必然的に、各領主は、自家消費分を除いた米を販売し、その代金であらゆる物を購入することとなった。それが市場の形成を促し、貨幣経済を発達させたとも言えるし、逆に、貨幣経済が整っていたから、米本位制度を実行できたとも言える。

領主が米を売る市場としては、天下の台所と呼ばれる大坂に最も多く集中した。貞享5年（1688年）に書かれた井原西鶴の『日本永代蔵』によると、北浜の淀屋米市では、「一刻の間に、五万貫」（2時間に125万石の取引）があったとされ、誇張はあるにせよ、相当量の商いがあったとみられる。市場では、信用取引、先物取引が成立していた。幕府は、しばしば大坂の米市を統制下に置こうとしたが、自由な商売の流れを止めることは出来なかった。江戸では、文政の初め頃（1818年頃）、現在の日本橋本町で米の先物取引が行われ、いったん中止された後、数年後に現在の蛸殻町で再開された。今日の証券取引所や穀物取引所は、その流れを汲んでいる。

江戸時代は、全体を通して米本位経済と貨幣経済が並立していたと言えるが、その中でも、時代が下るに連れて、より自由な貨幣経済の比率が増していくようになる。領主米の販売のみならず、農民も余剰生産物が増えて換金能力が増していった。貨幣の流通量が増えると、信用経済も発達し、手形決済も日常的に行われるようになった。

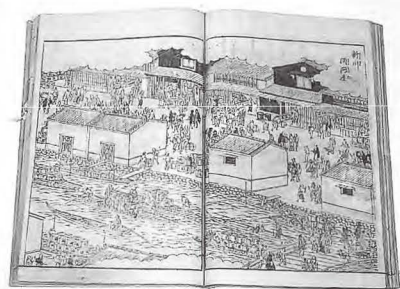
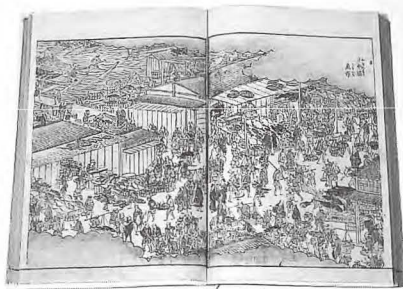
手形決済は、中世から存在してはいたが、日常的に行われるようになったのは、江戸時代に入ってからであった。菱垣廻船、樽廻船の発達に伴い、江戸か

ら大坂へ大量の支払いが恒常的になされるようになったことが、為替の利用を日常化させた。その中から、為替業務や貸し付け業務を行う両替商が、信用経済の要として台頭し、大坂商人の頂点に君臨する富豪として急成長を遂げたのである。

貨幣は大きく分けると、全国で通用する幕府の貨幣、各藩が発行する藩札、商人間での私札の3種類があった。幕府が発行する貨幣は、金貨・銀貨・銭貨（銅貨）の3種類に分かれていた。この内、銭貨は補助的な小口の通貨で、大口の取引には、西日本では主に銀貨が、東日本では主に金貨が通用していて、はっきり経済圏が分かれていた。しかし一方では全国規模の商取引が発達していたので、貨幣の交換比率が重要な問題となっていた。

幕府は、金座・銀座・銭座を設けて鑄造権を独占するとともに、慶長14年（1609年）、貨幣の交換比率を金1両＝銀50目＝永楽銭1貫文＝京銭4貫文と定めた。その後、元禄13年（1700年）には、金1両＝銀60目＝銭4貫文に改定した。しかし、実際には、市場は公定の比率では動かず、その時々の変動相場で取引がなされたのである。なお、幕府は度々貨幣の改鑄を行い、金銀の含有率を下げることで利益を上げ、財政赤字の補填に当てた。銭貨については、寛永から寛文期（1624～1672年）にかけて、寛永通宝が大量に鑄造され、永楽銭を駆逐して、銅貨の統一が成り、全国経済の発展に貢献した。

有力な両替商は、大名に対しても大口の貸し付けを行っていた。かくして、本来、士農工商の身分制度の最下位にあるはずの商人が、実質的には国家の経済を支配することとなり、幕府といえども、意のままに管理することは出来ない状況であった。



▲江戸の街のにぎわい（「東都名所図会」「江戸名所図会」より（資料提供：木内武郷））